

ペイライエウスからアカデメイアへ

(アテネの外港ペイライエウスにて)

アリストテレス：「ソクラテスとギリシア哲学を語る宴」にご参加の皆様。ようこそペイライエウスへ！ 船を下りられたらこちらにお集まり下さい。本日の会場はプラトン先生の学園であるアカデメイアです。本当は私の学園であるリュケイオンにお招きしたかったのですが、プラトン先生のたつての希望で、アカデメイアとなりました。時間はまだありますので、ゆっくりとご自由にアカデメイアまでお越してください。私はこれからすぐにアカデメイアまで参ります。地理に不案内な方はどうぞ、私の後に続いてください。町（アテネ）まではおよそ7キロです。

カイレポン：ソクラテス！ 君に会えてまた話を聞くことができるなんて、本当に嬉しいね。でもなんだったってこのペイライエウスが集合場所になったんだらう。アゴラのほうがずっと便利なのにな。

ソクラテス：多分、今日の参加者の中によそのポリスから来る人も何人もいるからだらう。プラトン君がその人たちのために気を利かせたんじゃないかな。

(一同は長城を歩きながらアテネの市街地へと向かう)

カイレポン：ソクラテス！ あそこにいるのは喜劇作家のアリストファネスではないかい。あいつも今日の会に呼ばれているのか！ 僕はあいつが嫌いだよ。大体、君が裁判に訴えられたのも、もとはと言えば、あいつが「雲」の中で、君について変な噂を流したためじゃないか。

ソクラテス：彼は僕のことを笑いものにしてくれたけど、あれは喜劇の上でのことだから、そう目くじらをたてることもないだらう。それに彼のことを本当に怒っていたB君が、「饗宴（シンポジオン）」で僕と彼を同席させてくれたのも、彼のことを許している証拠だよ。それにあの饗宴での彼の愛についての話は結構おもしろかったじゃないか。

カイレポン：きみがそういうなら仕方ないね。今日の宴を楽しみにしていたのに、ちょっと興ざめだよ。それはそうと、ソクラテス、前を並んで歩いているのはエピクロスとゼノンではないかな。エピクロスさんとゼノンさん！ 今日。お二人が並んで歩いているのは面白いですね。何しろお二人は快樂主義と禁欲主義を代表するのですから。

エピクロス：世間で考えているほど僕たち二人は生き方を異にするわけではないよ。それに僕のことを快樂主義者と言うのはやめてくれ。僕は肉体的快樂を決して認めてはいないのだからね。僕の言う快樂とはもっと精神的なものなのだよ。いわれのない恐れを理性の力で根拠のないものとして退けることで、決して揺らがない精神の安定を得ることが僕の理想なのだからね。

ゼノン：エピクロスさんの言うとおりでですよ。私は人間を不幸にする情念から解放された心の平静を理想としましたが、それは実際のところはエピクロスさんの理想の境地とそれほど変わらないのだと思います。それに、実際、世間の学者たちは私たちの時代の哲学のことを処世術として軽蔑する傾向にあります。私は、本当の意味で自分の生き方を問いかけるのが哲学というものならば、本当の哲学は私たちの時代に始まったといたいと思います。

* * * *

アリストテレス：皆さま町に着きました。まもなくアゴラです。

ソクラテス：懐かしい眺めだね。毒杯を仰いで以来だよ。僕はよくこのアゴラの列柱で人々に語りかけたものさ。知恵があると思っている人々には、本当は大切なことを何も知っていないということを理解できるように努力したものさ。そういえば、ゼノンさん。あなたの学派もこの列柱から生まれたのですよね。

ゼノン：そうですよ。私もあなたと同じくお金がなかったので、ここで人々に語りかけることから始めたのです。でも私とあなたの違いはポリスについての考え方だと思います。あなたにとってはアテネというポリスが一番大切なものですが、私にとっては、ポリスの枠をこえたコスモス（世界・宇宙）こそ、私たちの住む場所なのです。

ソクラテス：僕にはポリスを離れた生き方は想像もつかないよ。僕がハディス（冥界）に逝ったあと、随分世の中が変わったんだね。

アリストテレス：皆さま、まもなくディピュロン門です。あの門をくぐって城壁を出ると、後は道なりに1キロ余でアカデメイアです。

カイレポン：ソクラテス！ あそこのディピュロン門の前で僕たちに手を振っているのはゴルギアスとポロスとカリクレスの3人じゃないか。ひょっとしたら彼らも今日の会

に招待されたのだろうか。だとすると面白いね。あのときの再現になると思うよ。

ソクラテス：やあ、ゴルギアスさん。いつぞやは大変失礼しました。皆さんもアカデメイアへお出かけですか。まあ、立ち話もなんですから、門をくぐって出かけましょう。ここから先はアカデメイアまで一本道ですから。

ゴルギアス：あの時は君に随分つまこまれたね。僕は弁論術のすばらしさを強調したかったのに、君ときたら体育術に対する化粧法、医術に対する料理法のように、弁論術をまるで真の政治に対するものとして批判してくれたものね。

カイレポン：ゴルギアスさんには悪いけど、あの時のソクラテスの弁論術批判は痛快だったね。

ポロス：そんなにゴルギアス先生を批判しないで欲しいよ。もうお年なんだから。お疲れじゃないですか。僕にもっとお金があったら、四頭立ての馬車でも買ってゴルギアス先生だけでなく、皆さんをアカデメイアまで送ってあげることだってできるのに。本当に金持ちは羨ましいよ。

ソクラテス：君も相変わらずだね。まるで金持ちで何でも思い通りのことができる人が幸福だと思っているのだから。僕としては、その考えに絶対に同意できないよ。もっともカリクレスさんは僕に同意してはくれないだろうけどね。

カリクレス：当たり前さ。僕ははっきり言って、君みたいなウジウジした人間は大嫌いなものさ。何が「正しく生きる」だ。何が「真実」だ！そんなものはグチャグチャに踏みつぶしてやりたいよ。いいかい、現実には強い者が支配するんだ。これこそ自然の正義さ。そして人間にとって信用できるものは、自分が生きていて、様々の欲望をもっているということだけなのさ。ほら、例のギュゲスの指輪（注）君が手にしたら、君だってきっと勝手に欲望のままに生きてしまうと思うよ。

ソクラテス：相変わらず元気がいいね。でも僕は君に賛成できないよ。その点についてはゆっくり議論しようじゃないか。いまは、僕たちが歩いているケラメイコス区は戦没者の安らぎの場所だし、僕たちが向かおうとしているアカデメイアは神聖な神域なのだからね。魂を清めて哲学しながら歩くには絶好の散歩道だよ。

カリクレス：相変わらず現実離れしているね。大体、神なんていうものは弱者（劣者）が作りだしたノモスになのだ。君が言う哲学なんて何の役にもたたない。正直者が馬

鹿をみるっていうのは、何時の時代でも真理なのさ。

ソクラテス：僕はやはりそうは考えないんだ。善き人には生きているときも、死後も、悪しきことは何ひとつおこらないっていうのが僕の信念なのだ。できれば君もそう考えて欲しいのだけれど。

カイレポン：ソクラテス！むこうからプラトン君が手を振ってやってくるよ。多分君に早く会いたくて迎えに来たんだろう。

プラトン：皆さんようこそアカデメイアへいらっしゃいました。ここからは私が皆さまをご案内いたします。それにソクラテス先生！やっとお会いできました。先生のごことは私は片時も忘れることができませんでした。先生が裁判にかけられて死刑と決まったときは本当にショックでした。私は、先生が一体何者だったのだろうと問い続けました。先生の法廷での様子は「ソクラテスの弁明」で描きました。先生が毒杯を仰いでおなくなりになった場面は「パイドン」で描きました。これらの対話篇を書くことを通じて、私は自分の哲学をつくりあげたのです。そして二度と再び先生の身に起こったような不幸が起こらないためにも、真の哲学を身につけた人材を世界に送り込もうと、アカデメイアを設立したのです。真の正義は哲学からのみ見て取れると考えたのです。さあ、皆さん、アカデメイアに到着しました。

ソクラテス：あれ、あの看板はどうしたのかい。ほら「幾何学者にあらざるものこの門より入るべからず」というやつだよ。

プラトン：ああ、あの看板ですか。あんな看板、本当はかけていなかったのですよ。さて、もう少しお付き合い下さい。私は皆さまにお見せしたいものがあるのです。この道を右に曲がります。左手の夕陽が美しいでしょう。この坂道を登っていきます。この先がコロノスの丘です。

カリクレス：まったく、人を招待しておいて、どこまで歩かせれば気がすむのかい。腹がたつね。

プラトン：このあたりでいいでしょう。カリクレスさん！右を向いて遠くを見て下さい。

カリクレス：ああ！なんて素晴らしい眺めだ！アクロポリスの上のパルテノン神殿が夕陽を受けて輝いているじゃないか。なんて美しいんだ！

プラトン：カリクレスさんにも美しいと感じていただけましたか。でも何故カリクレスさんは「美しい」と思ったのでしょうか。実は、私はこの景色を皆さまに見ていただきたくて、この時間に皆さまをご招待したのです。この景色を見て美しいと感じるのは、私たちが本当は美とは何かを知っているからなのです。カリクレスさんは、現にあるこの世界の事物しか存在しないとお考えですし、またこの世界しか信用なさっていないようです。でもこの世界は本当は影のようなものなのです。本当に実在している世界はもっと美しいのです。そして、私たちはその美しい世界の住人だったのです。だからこそ、私たちは美とは何かを知っているのです。あのアクロポリスの輝きを見て、何か魂が揺さぶられませんか。この魂が揺さぶられる想いこそ、私がエロース（愛）と呼ぶものなのです。そして、この憧れの心を私に呼び起こしてくださったのが、ソクラテス先生、あなただったのです。それでは皆さま、私の家にもどって饗宴を始めましょう。できればソクラテス先生のお話を聴きながら、飲み明かしたいものです。

(注) ギュゲスの指輪とは、それを手にはめた人は、姿を自由に消すことができる魔法の指輪である。一度この指輪を手に入れて、誰からも自分の悪事が見られず、罰も受けないとなれば、日頃どんなに倫理的に立派なことを言っている人も、結局は自分の欲望のままに勝手な生き方をしてしまうといわれる。皆さんはカリクレスの主張に対して、どう考えるでしょうか。